

環境保全のボランティア体験講座 2024 第5回講座レポート

第5回目の講座は、9月15日(日)に大阪府最北端にある能勢町で開催しました。

この日の受講生は10名。

弊社テナントビルの1階フロアで今日の資料の説明をしたあと、貸切バスに乗り込みました。

現地近くにバスが到着後、今回ご協力頂く「能勢みどりすどクラブ」のボランティア活動拠点の母屋まで坂道を15分ほど歩きました。

右下の写真のように見渡す限り山と農作地です。



9月後半というのに連日最高気温は35℃に迫る猛暑でした。

到着後少し休憩したのち、「能勢みどりすどクラブ」の上野さんより、クラブ設立の経緯や三草山の自然や保全についての説明がありました。

午前中はまず三草山の自然を知る為に山を登って視察しました。



最初に山林内の石畳の説明がありました。大雨が降った後などは水が染み出て川のようになるそうで、2018年の台風時に荒れたので地元の学校の生徒さんたちをはじめ、ボランティアの方々が少しずつ横木を敷き、石を埋め込み叩き、整備されたそうです。



右と下の写真はここ北摂地方特有の台場クヌギと呼ばれる木。炭焼き文化を象徴するもので、地上から2m程度のところで切るスタイルなのですが、近年炭焼き文化の衰退によりこういった木は少なくなっています。



更に登っていくとゼフィルスの森に到着しました。ゼフィルスとは、ミドリシジミチョウの仲間の世界共通の学名で、全国に 25 種類いるゼフィルスのうちこの森には 10 種類が確認されているそうです。



更に登ると、行燈岩のある眺望のいい丘の上に出ました。奥のほうには大阪平野が見渡せます。左下写真の赤い帽子をかぶった上野さんの後ろにそびえるのはナラガシワの大木。ナラガシワが樹林を形成しているのは珍しいのですが、この地域ではその景観を見ることができます。



右下の写真はナラガシワと柏餅を包むカシワの葉の見分け方を説明している様子。カシワの葉柄（所謂付け根の軸）は極めて短いので、そこで見分けがつくと教えていただきました。

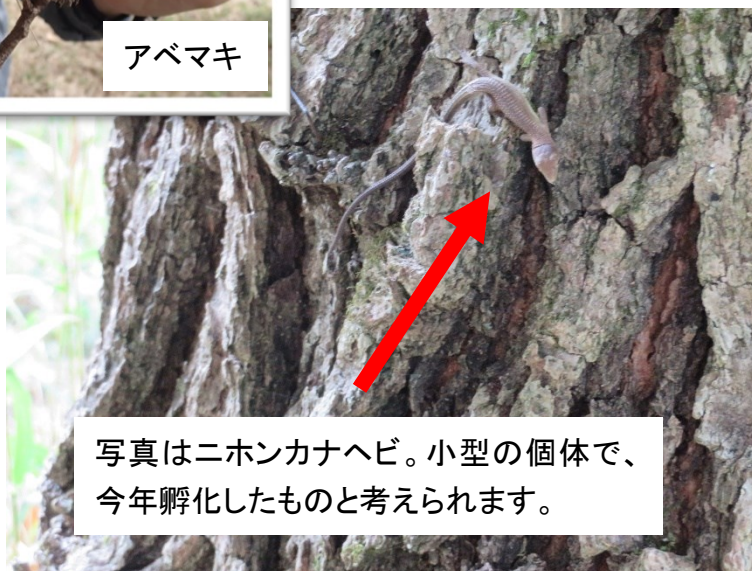


檜(ナラ)と呼ばれるブナ科のクヌギやアベマキ、先ほども紹介したナラガシワの見分け方を教わるため、葉っぱやドングリ拾い、生きものの観察が始まりました。



アベマキ

下の写真はノコギリクワガタの死骸です。大きなものでした。



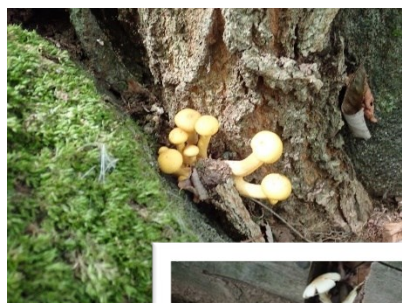
写真はニホンカナヘビ。小型の個体で、今年孵化したものと考えられます。

林内散策の様子です。林内は防鹿柵に囲われた区域以外はシカが踏み入った為か、よく見ると枝の下線が揃って見通しがいいのがわかります。これはディアライン(deer line)と呼ばれるもので、シカが比較的多く生息している地域独特の景観です。もっと密度の多い地域になると、下草にはワラビなどのシダ植物など、シカが食べない植物だけが育つのが目立ちます。



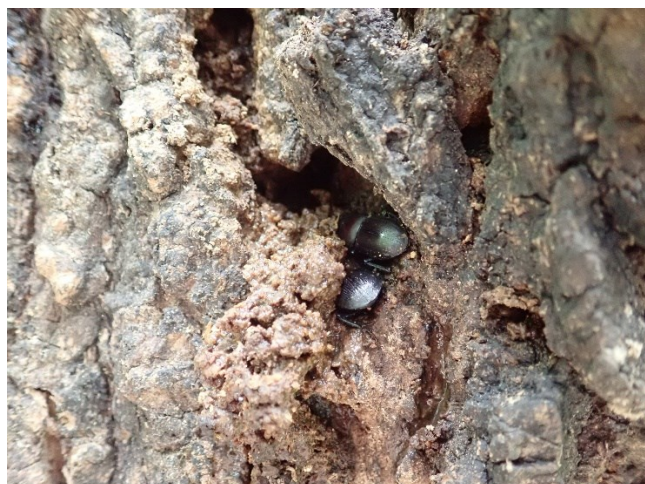
沢山の種類のキノコ類！

下の写真は熊ではないですが動物が爪を研いだ跡です。



左下の写真はお尻しか見えていせんがスジクワガタのペア(上がオスで下がメス)。クヌギの樹液にきている様子です。平野部より少し標高の高い山にいるのが特徴で、晩夏に個体数が増えます。大きさは有名なコクワガタより一回り小さいくらいです。

右下の写真は汗を吸いに来たヒカゲチョウ。汗に含まれる塩分やミネラルを吸水しているんです。

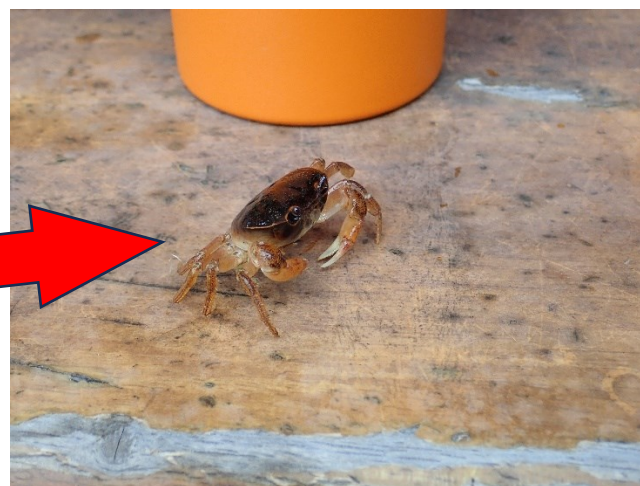


少し開けたところに出ました。木々の萌芽更新(樹木の伐採後、切り口付近から複数生える芽の生育を期待して森林の再生を図る方法)の管理をしている場所ですが、手前の防鹿柵外の切り株は新芽をシカが食べてしまったことにより、枯れてしまっているのが見て取れます。

右下の写真は、その奥にたたずむ展望デッキ。ここゼフィルスの森は樹上を飛行するミドリシジミが多く生息する場所ですが、それを観察する為に設置されています。初夏の観察会の時は、9mもの長さの捕虫網を手に、専門家らがこの周辺に集結して調査が行われます。



母屋に戻って昼食休憩をとろうとしたとき、近くの沢で子持ちサワガニを見つけた人が持ってきました。机の上に置いて皆さん観察中です。



食事中的受講生の様子。素敵な笑顔を沢山見られました☆



さて、ボランティアの方々が何やら機械を取り出しはじめました。
そう！火照った身体を冷やしてくれる、カキ氷の機械です！

この日も猛暑・・・

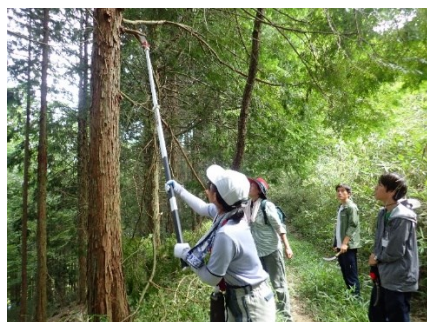
事前に上野さんからご提案があり、事務局サイドでお願いしていました。
受講生やボランティアの皆さん、スタッフもカキ氷をいただき、リセットできました！
大好評でした！やはりこういうのも必要ですね！ありがとうございました☆☆☆



さて、元気になったところで、午後からの最初の活動は山道（作業道）の除草！です。
ボランティアの方は刈払機を、受講生は各々で鎌などを持って現地に向かって移動開始しました。



途中の山道脇から、道路の上を横切る枝などの処理を、高枝切りノコギリで切断して進みました。これは恐らく全員が初経験だったと思いますが、なかなか楽しく保全活動が出来ました。



続いては北アメリカ原産のダンドボロギクという外来種で埋め尽くされた山道での作業です。若い葉と茎は食用にもなるのですが、開けた空間ができると、もの凄い繁殖力で一気に広がり覆いつくします。上野さんから鎌の使い方のレクチャーを受けたのちにこれらを刈りはじめましたが、風で物凄い数の綿毛が飛散し、受講生たちを驚かせました。



左下の写真は鎌を片手にカメラに向かってポーズをとる受講生。

右下の写真はヨウシュヤマゴボウという、全体にわたって毒がある北アメリカ原産の外来種。こちらも物凄く繁茂していたのでボランティアの方が刈払機で一掃しています。



左の写真は、人海戦術で外来植物などが一掃された山道。上に挙げた写真と見比べると、本来の道がしっかり確保できたのが分かります。ただ、ボランティアさんの中には疲労困憊の方もおられ、酷暑の中の作業はリスクが大きかったです。

左下の写真はこの地区で育てられているお米の紹介、右下の写真はこれから我々が少し刈り取る、古代米を紹介している様子です。稲穂が赤いのが特徴です。



左の写真は、持ち帰り用に刈り取った古代米に、ご満悦の受講生たちの様子。滅多にない経験が出来ました。

東屋のある拠点に戻る途中、台場クヌギの説明をお願いしました。

奥に見える大きなクヌギ、実はこの講座の参加者募集時に大活躍したチラシの正面を飾った台場クヌギなんです。

レポートの最初でも少し説明しましたが、この地区はその昔、菊炭と呼ばれる木炭の生産で有名な場所で、その生産過程で出来上がる特徴的な形状をした台場クヌギと呼ばれる木が沢山存在していました。

菊炭はお殿様への献上品として納められていたそうで、その見た目が菊の花のように美しいこと、茶の湯を沸かすのに最適な温度で燃烧することから、茶席に使われていたようです。

しかし今はその文化は衰退してしまい、木の利用がされなくなって林は放棄され、管理されないことでただ大径化したクヌギが弱ってしまい問題になっているようです。



その炭作りに使われていた炭焼き窯の説明もしていただきました。下の写真は、東屋に戻る途中に道路の脇にある炭焼き窯で、左の笹藪の中に見える岩が窯の上部になります。昔はこういった場所のあちらこちらにあったようです。



活動拠点に戻ってきました。稲が少し長かったので、適度な長さに切り揃えている様子です。中には古代米以外の稲穂も持ち帰らせてもらっている受講生もいました。

そしていつものふり返りの様子です。皆で今日学んだことの感想などを共有しました。



そして最後に、帰宅後にマダニが体についていないか、よく見ておくようにとお伝えし、シカとイノシシとマダニとオオセンチコガネ(いわゆるフンコロガシ)はセットであるとお話をしました。野生動物の多い地区は、それに依存する昆虫も沢山生息していますので、活動後はこういったことにも注意が必要です。

ご協力頂いた能勢みどりすとクラブの皆さんにお礼を言ったあと、活動地を後にしました。

下の写真は活動地からバスに向かう帰路の様子です。
見事な里山風景をあとにします。



バスに乗り込み、10 分ほどのところにある、地元の特産品などを取り扱う道の駅に立ち寄りまし
た。閉店間際だったので、野菜などは殆ど売り切れていましたが、菊炭をはじめ地元で収穫された
ブドウなどなども売られており、受講生たちはそれを購入して食べるなどして思い思いに過ごして
いました。



さて、再度バスに乗り1 時間ほどで解散場所に
到着しました。
右の写真はバスから降りて、次回の予告をして
いる様子です。
その後皆さんは、次回の淀川城北ワンドでの
講座参加を楽しみに解散しました。



アンケートでは、受講生全員から参加満足度に対する高い評価を頂きました。
記述内容例としては以下のようなものがありました。

・今回の講座からやはり環境保全に関わる年代の高齢化は深刻だと感じた。また、自然とのかかわりが変化しつつあるなかで自分たちが新たな自然での共生方法を模索し、世代交代していく必要性を感じた。

・今回ゼフィルスの森の講座を受けて鹿柵の重要性や人手不足(林業界の働き手)について学びました。実際に鹿柵の影響内と外での林床の様子を見て、工夫一つで森を守れることに感動しました。

・里山の保全活動を詳しく知れたり、稲の収穫体験や外来種の駆除などの体験もさせていただきとても満足な内容でした。また能勢の歴史が関わって今の能勢の環境になったことや、昔の人々がどのように自然と共生していたのかを知ることによってこれからの私たちの暮らし方や自然とのかかわり方に活かしていきたら良いと感じるきっかけになりました。他にも薪炭林をこれからどのように活かし、薪炭林の中の生態系を守っていくのかも、もっと考えて行動を起こしていきたいと感じました。

以上のような回答が多数寄せられ、外来種対策や、獣害対策の必要な里山の環境保全について理解し、またそれにかかわる人々の高齢化問題も知ることができた講座となりました。

行動変容に繋がるような回答内容にも、事務局としても大きく期待しています。

既にこの活動地に参加宣言をしている受講生の話を耳にしており、更に受講生以外の学生さんも複数人活動地に参加する話があるなど、波及効果も出ています。

その他、このゼフィルスの森でゼフィルスを見たかったと希望する声が出ており、スタッフは次年度の講座企画の調整を既にはじめているのでした。